

第15回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「『いし』のライオン」

大阪府立岸和田高校三年 迫田 知樹



賢治のまちから  
**全国高校生★童話大賞**

## 『「いし」のライオン』

大阪府立岸和田高等学校三年 さじだ 迫田 知樹

ぼくにはアーサーという名前があります。

ぼくがぼくであること、すなわち、ぼくがライオンであること。もっと詳しくいうと、ぼくが石でできたライオン、ガーライルであることを認識した、そのときからすでにありました。

木々に囲まれた建物にぼくはいます。雨が降ったときは、あまどい 雨樋であるぼくの口を通って地面に雨が流れ落ちるのでした。ぼくはその仕事が嫌いじやありません。石でできているから、指一本どころかたてがみ一本動きませんし、とにかく暇だから仕方ないのです。

暇といえば、建物の横に生えた立派なオークのせいです。一日中景色が変わらないのもそのせいです。枝がぼくのことを覆い隠してしまってからです。あまりに邪魔なので、雨の日には、ぼくの口を通って流れる水をその黒くてごつごつした枝にぶつかけてやります。ぼくは動けませんので、せっかく葉っぱで雨に濡れることを防いでいるオークに、横から雨をかけることくらいしかできないのでした。

でも、変化がないわけでもないんです。たとえば鳥。オークの枝にやってくる小鳥たち。きれいなその鳴き声には、いつも聴き入ってしまいます。ぼくは、そんな鳥たちが、ぼくの視界の中で動き回ったり飛び回ったりするのを見るのが好きでしたが、それ以上に、もっと好きなことがあります。

「ごきげんよう、アーサー」

オーラを登つて枝に腰掛け、ぼくに声をかけたのは、人間の女の子でした。太陽の日差しみたいな黄金の髪。たまに近くの池からやってくるカワセミみたいに神秘的な青の瞳。一つのほつれもないきれいな服に身を包んで、これまで汚れ一つないきれいで真っ赤な靴を履いています。

「聞いてよアーサー。あのね」





彼女はついこの前九歳になつたのだそうです。雛の羽毛よりもふわふわそうな髪に葉っぱがつくるもいとわないので、こうしてたまに、ぼくにお話を聞かせにきてくれます。

「また爺やがね、勉強勉強って言うのよ。わたしはもつと遊びたいのに。ちよつと休憩したらすぐ注意するの、こんな風に！」

そう言つて彼女は、しかつめららしい顔を精一杯にして、「シャルロット様！お稽古の時間ですぞ！歴史の予習はなされたのですか？ブ、アーカイロンのご準備は？」と言いました。ぼくは彼女の「ヴァイオリン」の言い方が面白かったので笑いましたが、いつも彼女が「爺や」の真似をするときは大袈裟<sup>おおげさ</sup>に発音してみせるので、ぼくはそれがおかしくって、いつも笑つてしまふのでした。

もちろん、彼女にぼくの笑い声は聞こえません。ぼくは石。動けません。もちろん笑い声なんかあるはずがないのです。

「もうあんまりに嫌になつちやつたから、逃げ出してきちゃつた！」この教会ね、いつもお城から見えてるんだよ。すぐ隣だしね。あなたの姿は見えないけれど

それでも彼女は、物言わないぼくを話し相手にするために、こうして、やつてきてくれるわけでした。

「わたしね、将来お花屋さんになりたいの。だからね、お庭で働いてるおじいさんが好きなのよ。わたしが行くと、いつもこれはなんて花だく、つて教えてくれるから」

ぼくにとつての唯一の不満は、相槌<sup>あいづち</sup>を打てないことでした。ただそれだけでした。

「木の登り方もね、そのおじいさんが教えてくれたのよ。おれが教えたなんて誰にも言っちゃダメだぞ」とか言いながら！」

言つて彼女は非常に愛らしい様子で笑いました。くすくす、くすくす。ぼくは彼女の笑つた顔が、声が、好きです。

「シャルロット様ー！ シャルロット様！ どこに行かれたのですか！」

たいてい、そんな声が聞こえると、ぼくたちのおしゃべりの時間は終わりなのでした。彼女の言う爺やが慌てた様子で探しにくるのです。そうすると彼女は、



「もう。爺やつたら、わたしが抜け出したのに気付くのが早いのだわ。ちゃんとばれないように、アンをかわりに置いてきたのに」

そう言つて、するするとオークの木をおりていきました。ちなみにアンというのは彼女の侍女で、年も同じくらいでよく似ているのだそうです。

「それじゃあまたね、アーサー！」

ちょうどオークの根元あたりからぼくを見上げて、彼女は駆けていきました。なにごとか会話する声が遠ざかっていつて、ぼくは、また一人になりました。

でも、寂しくはありません。全く文字の通り石頭なぼくでさえ知っている通り、彼女はこの町を治めるお偉い貴族様の娘さんなのです。だから、彼女が「また」と言えば「また」はあるのです。

石でできていて、おまけにオークの枝まで覆いかぶさつているぼくは、彼女がここに来るのを待つことしかできません。ですから、その言葉は嬉しいものでした。

その後も彼女は、少ないときは一ヶ月に一回、多い時には三日に一度くらいの頻度でぼくのところへやってきました。そのたびに城での勉強が嫌なこと、尊敬するお祖父様のこと、お父様やお母様に怒られたことや褒められたこと、庭師に教えてもらつた花の見分け方なんかを話してくれるのです。『きげんよう、アーサー。ぼくは、彼女のその挨拶を待ち望んでいました。おひめさまの挨拶はいつもこれなのです。だからこの挨拶を聞くと、ぼくの心は踊るのでした。そして、お話はいつも城であつた嫌なことから始まるのです。今日はお城でこんなことがあつたの、だから嫌になつて逃げ出してきちゃつた。そんなお話から入るのに、彼女の話はあつちに飛びこつちに飛び、その結果ぼくは彼女がいかに城のみんなのことが好きか、城のみんなが彼女のことを大事に思つているかを知つたのでした。

ちょうど雨が降つた次の日でした。ぼくが本来の、たつたひとつのお仕事である雨桶としての役割を果たした後、わずかに雨のしずくが口から垂れるのをぼんやり感じていたときです。下の方でがさがさと音がしました。

ぼくは彼女の到来にはつとします。以前来た時からもう一月は空いていましたので、ぼくは、もうすぐ十二歳になるらしいこのおひめさまが来るのをまだかまだかと待ちわびていたのでした。



しかし、彼女のいつもの挨拶は。

「『きげんよう、アーキヤフ！』

悲鳴によつて、果たされませんでした。ぼくは一部始終を見ている」としかできません。

ぼくのことを覆い隠すうつとうしいオークの木には、何本もの枝が張り出していました。そして彼女をぼくと同じ高さまで導いてくれるオークの枝々の中の一本に、彼女がいつも足をかける枝があつたのです。  
ちょうど、ぼくが吐く雨水が。

直接かかる、その場所に。

オークへの嫌がらせのためだー、なんて喜んでいた自分のことを碎いてしまったくなりました。ぼくが一生懸命吐き出していた雨水に濡れたせいで、その枝が、滑りやすくなつていたのです。

彼女はオークから転落しました。

ぼくに流れているのは雨水だけですが、サツと血の気が引いたように感じました。この言い回しは彼女が包丁を落とした話をしてくれた時に聞いたものです。「本当に血の気が引いたんだよー。まあ、あなたに流れてるのは雨だけだけれどね。私たちには血が流れるんだよ。この前お稽古の時間に教えてもらったの……」 彼女はうんざりした顔で教えてくれたのでした。

ごん、と鈍い音。

くしくも、彼女が教えてくれた血の「ほんもの」を見ることになつてしましました。体勢が悪かつたのでしょ、頭から落ちたために氣を失っているようです。力なく投げ出された手足。彼女の頭が置かれた辺りにはひときわ盛り上がつたオークの根があつて、ちょうどそこに後頭部をぶつけたみたいでした。太陽のように輝いている髪にどんどん真っ赤な血が流れて、まるで夕焼けのようです。

ぼくはどうしたらいいんだろう、と必死に考えていました。でも、ぜんぜん良い考えが思い浮かびません。しゃせん所詮ぼくは石でできたライオンなのです。雨を吐き出すことしか、能がないのです。

ぼくはぼくにできることを必死で考えました。眼下では彼女が目を覚ます様子もありません。そうこうしているうちに、いつもの、「シャルロット様ー！」

という声が聞こえてきて、ぼくは、良かつた！　と思いました。これで彼女は大丈夫だ！　と。

しかし声は近くを通り過ぎ、だんだん遠くなりはじめたのです。気付いてないんだ！　ぼくは焦りました。胸の上下があるのでまだ息はあるようですが、頭を打つて氣を失っているのです、このまま放つておいて良いはずがありません。一刻でも早く、医者に見てもらわねばならないでしょう。

ぼくは必死でした。

彼女はここにいるよ！　お願い、気付いて！　爺や！

しかし声はどんどん遠ざかっていつてしまいます。ぼくは無力でした。所詮石でできた、ただのガーゴイルなのです。それでもぼくは、祈りました。声が出せないぼくは、祈るしかないのでしょう。

彼女はここにいるよ！　爺や！　爺やつ！　気付いてよ……っ！

「…………おん！」  
必死でした。とにかく、大好きな彼女が失われるかもしれないという恐怖でいっぱいいっぱいになっていたのです。

「…………おひめさまはここにいるんだつ！　ねえ！」

「…………おおおおおおおん！」

爺やつたら！　ここだよ！　お願い、早く来てよ！

「…………うおおおおおおん！」

ぼくの必死の願いが通じたのか否か、爺やのおひめさまを探す声が近づいてきました。

「なんだ？　この辺りから獣の鳴き声が……シャルロット様！　シャルロット様っ！」

爺やは横たわる彼女を見付け、駆け寄つて來たようです。呼吸を確かめ立ち上がると、慌ててどこかに走つて行き、誰かを連れて帰つてきました。医者です。

「大丈夫です。血が出ていますが、大した怪我けがでもありません。今は驚いて氣絶してしまつてているだけですから、じきに目を覚ますでしょう」医者がそう言つたのを聞いて、爺やはホッと胸をなでおろしました。ぼくもそうした



かつたのですが、残念なことになでおろされる胸もなおろす腕も、動きはしませんでした。

「それにしても、シャルロット様は木登りの『趣味が？ 危ないので、絶対にやめさせてください。もしものことがあつたら……』」

「はっ、それについては必ずや。しかし、大事に至らなくて本当に……」

そんなことを話しながら、おひめさまを背負った爺やと医者は去つて行きました。

それからしばらく経ちました。ぼくは雨が降るたびに、自分の仕事が嫌で嫌でたまりませんでした。ぼくのせいでは怪我をしてしまったのですから当然のことと言えました。

彼女はそれ以来、一度もぼくのところへは来なくなってしまいました。あの太陽みたいな笑顔に、くるくると愛らしい瞳を輝かせて城での生活を話してくれるおひめさまは、もう、木登りはしないのでした。それは当然のことと言えましたし、なによりぼくは彼女をあんな目にあわせてしまったことに責任を感じていましたから、これはぼくにとつての罰なのだとと思いました。きっと神様が、ぼくのことを見ていたのです。だから彼女に怪我をさせてしまったぼくを、こらしめようとしているのです。

ああ、ああ。それなら神様、どうかお願ひです。人間のように眠ることもかなわず、一日中考え続けるこんなぼくから、彼女を取り上げるだけなんていうもつとも酷い仕打ちはおやめください。どうせ罰を与えるなら、いつそぼくのことを碎いてください。

しかしもちろんぼくの願い事が聞き届けられるわけはありません。なぜならぼくは、罪を犯した咎<sup>とが</sup>びとだつたからです。咎びとは、罪を償わなければならぬと決まっているのです。ぼくは朽ちるまで、ここにオークの縁に抱かれたまま、一人ぼっち……。

ある晴れた夜、月のよく見える晩のことでした。がさがさ。音がしたのです。

朦朧<sup>もうろう</sup>としていたぼくの意識は、途端に覚醒しました。オークの枝をこんな風に揺らすのは、彼女以外にいなかつたからです。





しばらくしたのち、「『」きげんよう、アーサー』という変わらない彼女の声が聞こえ、ぼくは、ぼくが雨樋であることを思い出しました。そう、ぼくが流せるのは雨水のしづくだけなのです。

「お久しぶりね。あなたはぜんぜん変わらないわ」

そう言う彼女はまるで別人のようでしたが、ひらひらの服にも関わらず、器用にもオークの木を登つてくる彼女はやっぱり彼女なのでした。

「五年ぶりくらいかしら?」

ということは彼女はもう十七歳になろうかという年頃。前に見た時よりもぐんと大人びたその姿は月光を受けて、ひときわ輝いて見えました。成長して、可愛らしいよりも美しいが似合うようになった彼女は、しかし変わらない、可愛らしい笑顔を浮かべて、ぼくに手を触れます。

「『めんね、アーサー。わたしがここから落ちたあの日、眼がさめるとお城のみんながいて、もう危ないことばなしで誓わされたの。なんだか爺やも先生も急に優しくなっちゃったから、そうしたら頑張らなくちゃって思うじゃない? 嫌だつたけど、一生懸命お勉強したらなんだか楽しくなつてしまつて、今まで嫌だつて思つてたことも、逃げずに頑張ろうつて思えるようになつたの』」

彼女は子供の頃いつもそうしていたみたいに、枝に腰掛け幹に背中を預けて、こちらを向きました。少し前屈みになるとこちらに手が届き、大きくなつたんだと改めて思われます。

「あなたのおかげよ、アーサー」

その言葉で、なんと報われたことでしょうが。雨水のしづくが数滴、こぼれました。

「でも、『めんね、アーサー。もう嫌なことがあつても逃げない、つて決めて、何かあるたびにあなたのところまで来るのはやめようつて思つていたのだけれど、また来ちゃつた。多分ここにくるのも最後になると思うから、聞いてくれる? アーサー。あのね』

彼女はそう言って、木々の隙間から空を見上げました。真っ白い喉<sup>のど</sup>がこちらにさらされますが、ぼくは石造りのライオンなので噛<sup>か</sup>みつきはしません。



「わたしね。結婚しなきゃいけないの。隣の国の侯爵のところに。向こうはもう五十手前のおじ様なのよ。いわゆる政略結婚つてやつね。それが嫌になつて……」

ぼくは彼女が話すのを、相変わらず相槌も打てないで、ただ聞いていました。

「……逃げ出してきちゃつた」

そう言つたきり、月を見上げ、ぼくが不安になるくらい長い間を置いたあと、彼女はぼくのことを見据えました。

「でも、もう、逃げない。決めたの。わたしは侯爵に嫁ぐのだわ。ありがとうアーサー、わたしの決意を聞いてくれて。あなたが小さい頃からわたしの話を聞いてくれたおかげで、わたしはここまでこれた」

そう言つて彼女は、木を下りました。

「おやすみ、アーサー」

彼女の声は、震えていました。ぼくは見逃さなかつたし、聞き逃さなかつたのです。二回りも三回りも違う男に嫁ぐ彼女の眼に浮かぶ悲愴を、うつすらと浮かぶ涙を。そしてその涙を流すまいとしつつも、しかし隠しきれずに少し震えていた声を。

ぼくはガーゴイル。石でできたライオン。

「うおおおおおおおん……」

ぼくにできることはなんだろう。彼女のためにできることとは？ 石のようを考え込んで動かなかつた、石でできたぼくは、三日三晩考え続けました。

「う、う、うおおおおおおん……！」

月に向かつて吠える。四肢が動く。そのとき、ぼくは自分が自由に動けることを悟りました。相変わらず体は石でできていましたが今はライオンそのものでした。試しに石畳の道を走つてみるとものすごい速度で町並みが遠ざかっていきます。ぼくはまた月に吠えました。

おひめさまの言つていた隣の国まではすぐでした。初めて見るものばかりの世界に目もくれず、ずっと走り続けていたら本当にすぐだったのです。出发するときに見た月の位置が、ほんの少し傾いた程度でした。今ならなんでもできると、そう思います。ぼくは彼女に涙を流させないために、なんでもすると決めたのです。



大きな大きな建物でした。一日でこれがおひめさまの言う侯爵の城なのだとわかります。ぼくは真正面からその建物に突っ込みました。何事か、とたくさん出てきた武器や盾を持った人間たちをなぎ倒し、ずんずん進んでいました。ぼくの石の鼻は、彼女の匂いを嗅ぎ取っています。彼女は、確かにこの城の中にはいるのです。

そうして「一体何事か！」と血相を変えて、侯爵が姿を現しました。そばにぼくの大好きなおひめさまがいたからわかりました。

「うおおおおおおん！」

ぼくは一声吠えると、嬉しくなつて彼女に駆け寄りそうになりました。でも今は、侯爵をやつつける方が先だ、と、そう思いなおします。

ぐ、っと四肢に力を込めたその瞬間、

「やめて！……やめて、アーサー！」

ぼくのからだは途端に動かなくなりました。石に戻ったからなのか、もうぼくにはなにがなんだかわかりません。ぼくは、あなたに笑つて欲しいと思って、喜んで欲しいと思って、それで、それで……。

遅れて駆け込んできた何人もの城の兵士たち。彼女を見ると、ぼくに背を向けてしまいました。

「…………砕き、なさい」

そんな。

ぼくは、ぼくは……。

「なんだこいつは」

「ライオンの置物か？」

「なんでこんなところに」

ただの動かぬ石に戻つてしまい、もはや考へることしかできないぼくに、

昔の記憶がよみがえります。

それは、最初の記憶でした。

「あなたも、こんなところで隠れん坊をしているの？　わたしはシャルロット。爺やが嫌になつて逃げてきちゃつた」

確か、ちょうど十年前の記憶です。

「あなたは……アーサーよ。もしもわたしが怖い目にあつたら、絶対に助けに来てね！」

賀治のまちから

# 高校生☆讀書大賞



おひめさま、ぼくは、ぼくは、だからあなたを助けるために……  
「うおおおおおおおおん……」  
ぼくを碎く兵士の手が止まる気配はありませんでした。